

令和元年度 前期末 人間学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、令和元年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 109 科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 1（心理学科 16 科目）、および図 2（コミュニケーション学科 15 科目）にそれぞれ示した。図 1 に示された心理学科の学生の延べ人数は 614 名で、各学年それぞれ 1 年生=455 名、2 年=119 名、3 年=11 名 4 年=19 名であった。また、図 2 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 569 名で、各学年それぞれ 1 年=323 名、2 年=193 名、3 年=35 名、4 年=18 名であった。前年度までと同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに 3、4 年生の受講数が少なかった。心理学科では、昨年度と比べると、全項目の評価と各学年の評価の両面において評価が高い。かつ、今年度は 3 年生の回答値が全項目で高くなっている。同様にコミュニケーション学科でも、昨年度の評価と比べると今年度の評価は全体的に高くなっている。昨年度は、3 年生の評価が 4 項目（授業内容、授業方法、総合評価、全体）全てで低かったが、今年度はそのような落ち込みが見られなくなった。

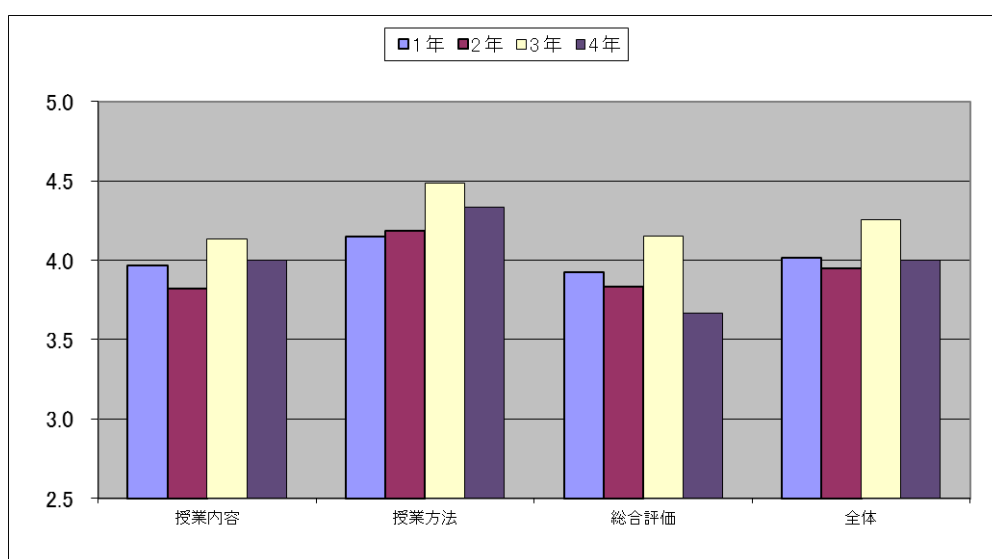


図 1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=455 名、2 年=119 名、3 年=11 名、4 年=19 名

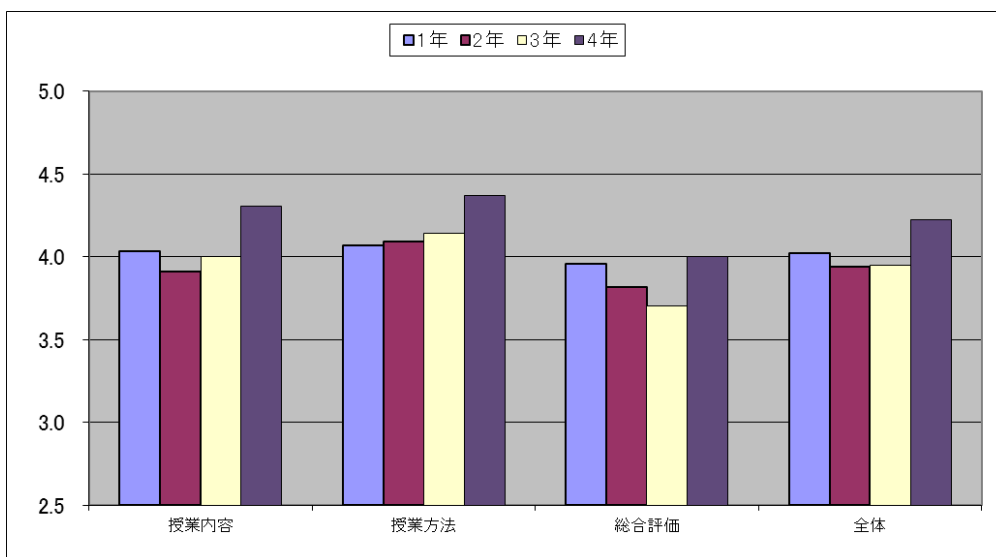


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=323名、2年=193名、3年=35名、4年=18名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科15科目）、および図4（コミュニケーション学科14科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は214名で、各学年それぞれ1年=114名、2年=100名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は217名で、各学年それぞれ1年=115名、2年=85名、3年=17名であった。

心理学科においては、1年は4点を超える高い評価であり、2年は1年より低いものの4点前後と昨年度より高く評価されていた。一方で、コミュニケーション学科においては、学年が上がるごとに全体的な評価が高くなっている。また、昨年度との比較では、今年度の1,2年の総合評価と全体が高くなっている。

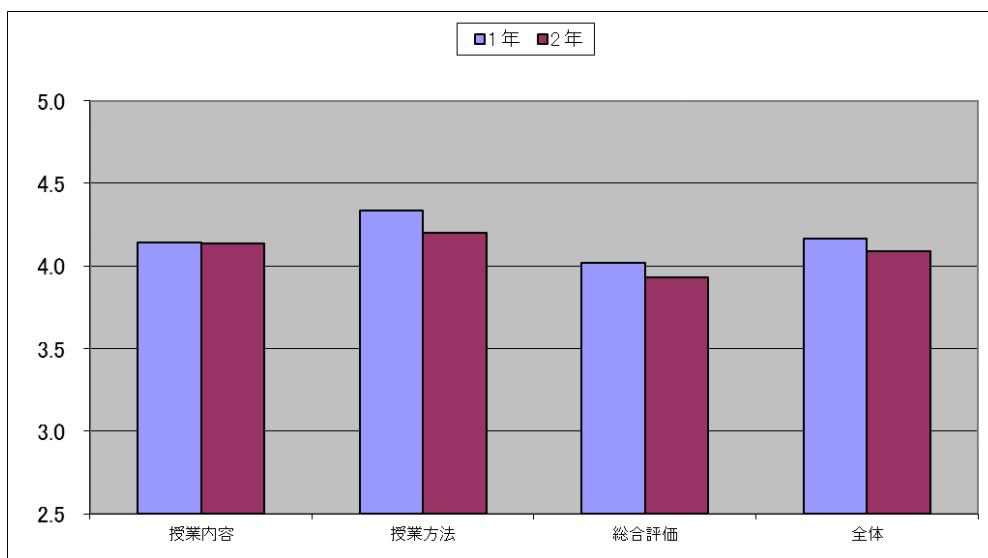


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=114名、2年=100名

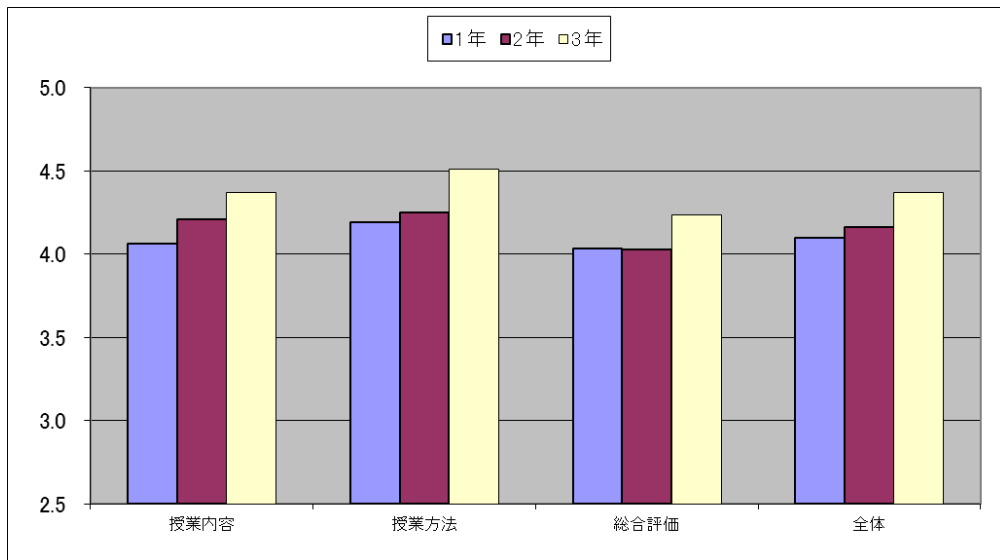


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=115名、2年=85名、3年=17名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 24 科目、コミュニケーション学科 47 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図5（心理学科）、および図6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図5に示された心理学科の学生の延べ人数は、1,389名で、各学年それぞれ1年=238名、2年=522名、3年=495名、4年=134名であった。また、図6に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は、1,190名で、各学年それぞれ1年=406名、2年=467名、3年=263名、4年=54名であった。

心理学科において、昨年度の評価点と比べて、今年度は総じて高かった。この傾向はどの学年にも見られた。コミュニケーション学科においては、本年度は昨年度と同様に、2年と4年の評価点が高く、1年と3年の評価点が低い傾向が見られた。一方で、昨年度と比べるとどの項目においても評価点が高くなっていることが分かる。この点については、今後の検討を要すると言えよう。

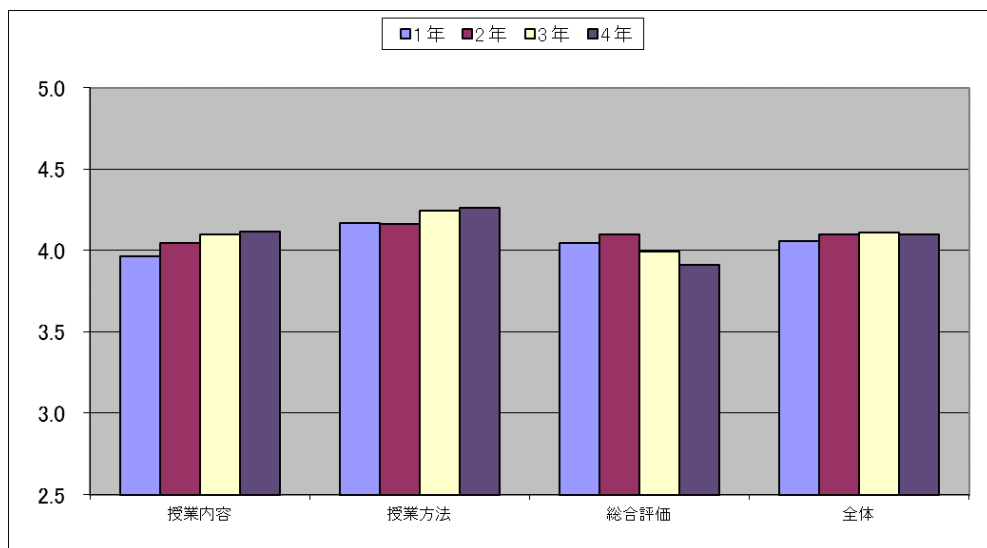


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=238名、2年=522名、3年=495名、4年=134名

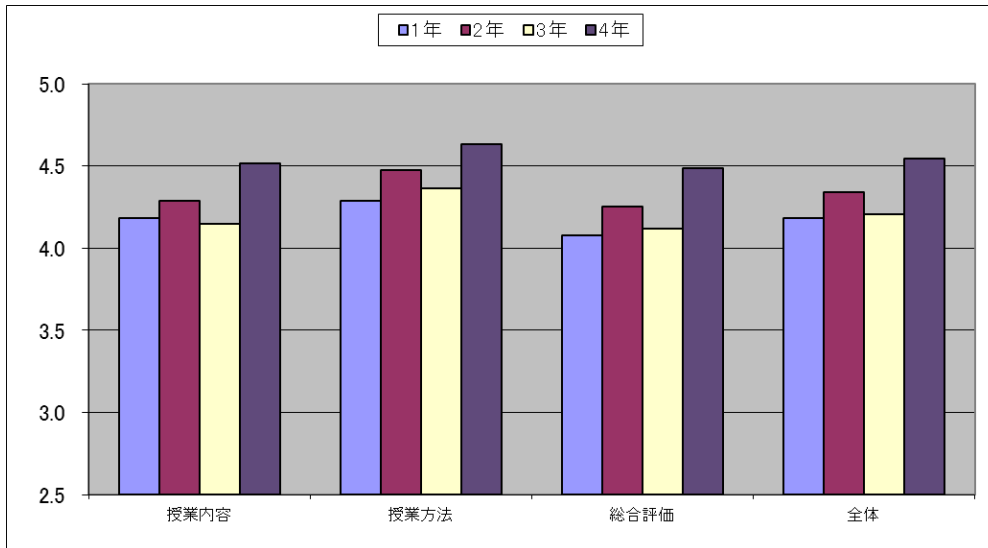


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=406名、2年=467名、3年=263名、4年=54名

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降7節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は107科目であったが、学部共通科目13科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図7は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ15、22科目、コミュニケーション学科では、14、43科目であった。

昨年度までは、両学科とも共通科目より専門科目が高い傾向が見られたが、本年度の心理学科では履修形態による違いはほとんど見られなかった。また、共通科目、専門科目ともに昨年度と比べて評価が高くなっており、履修形態を問わずに評価が上がっていることが分かる。一方、コミュニケーション学科では、昨年と同様、専門科目の方が高い評価が得られていると言える。

以下の図の調査対象総科目数=94科目（学部共通科目13科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため調査対象から除いている）

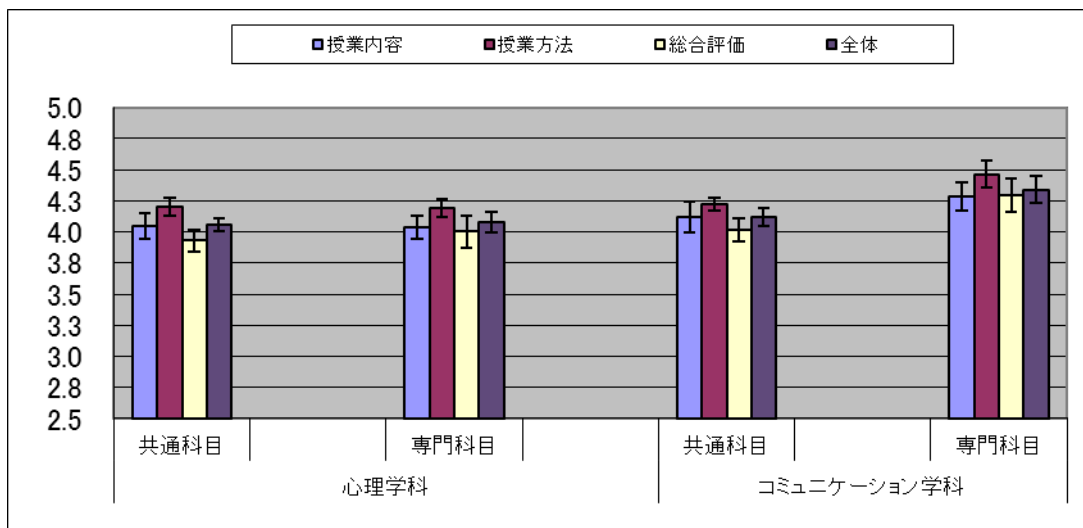


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

共通科目と専門科目数は、心理学科で15、22科目、
コミュニケーション学科で14、43科目

(5) 必修科目と選択科目の比較

図8は別の履修形態ごと(必修科目と選択科目)の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ13、24科目、コミュニケーション学科では、14、43科目であった。本年度は両学科ともに選択科目の評価の方が高い傾向にある。心理学科では必修科目、選択科目の双方で評価点が上昇しているが、上昇の幅は選択科目のほうが顕著である。コミュニケーション学科においても、必修科目、選択科目の双方で評価点が高くなっているが、選択科目の評価点の上昇の幅が大きくなっている。

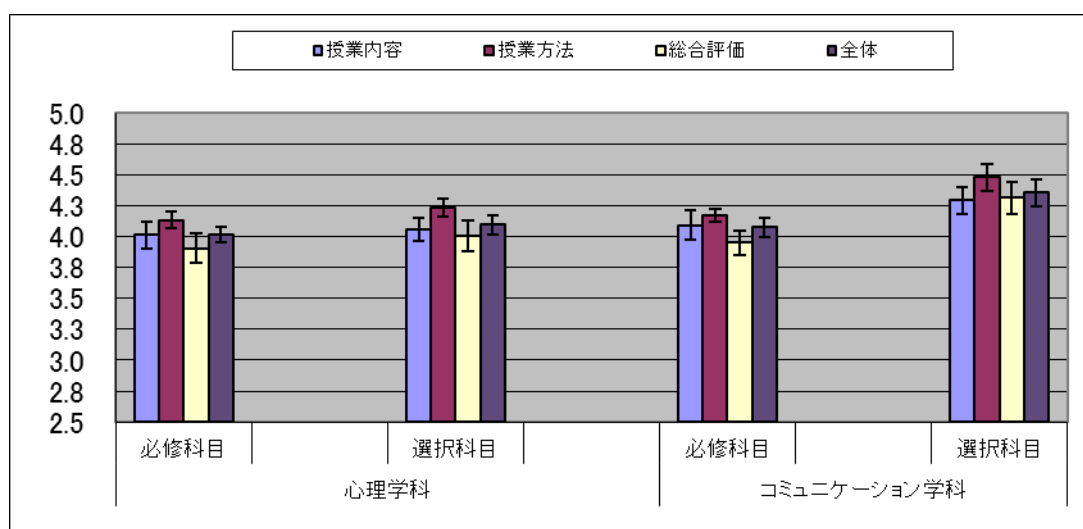


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、心理学科で13、24科目、
コミュニケーション学科で14、43科目

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ10科目、27科目、コミュニケーション学科では、37科目、20科目であった。

心理学科は昨年度と同様に、本年度は履修者数による違いはほとんど見られなかった。一方、コミュニケーション学科では、本年度も40名未満の科目の評価点が高い傾向にある。

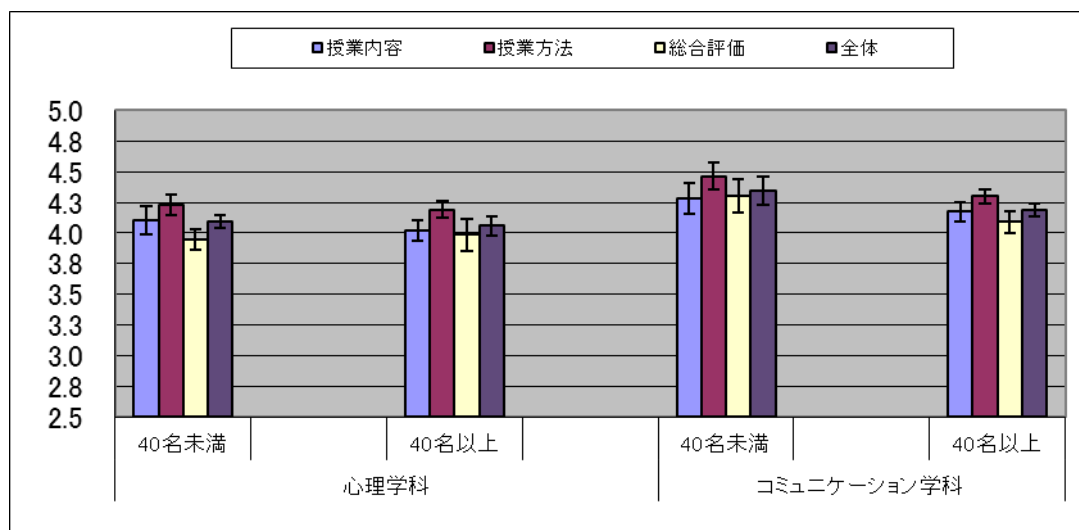


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）
40名未満、40名以上の科目数は、心理学科で10、27科目、
コミュニケーション学科で37、20科目

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図10（心理学科）と図11（コミュニケーション学科）である。

心理学科ではほとんど相関は見られなかった（心理学科 $r = -0.06$ 、昨年度 $r = 0.09$ ）が、コミュニケーション学科では、昨年度同様に弱い負の相関（ $r = -0.46$ 、昨年度 $r = -0.35$ ）が見られた。

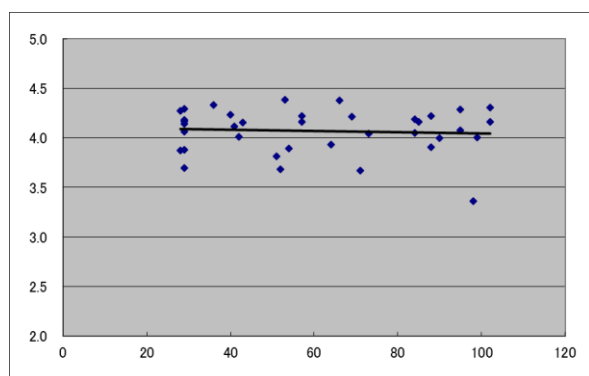


図10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.06$ (n=37)

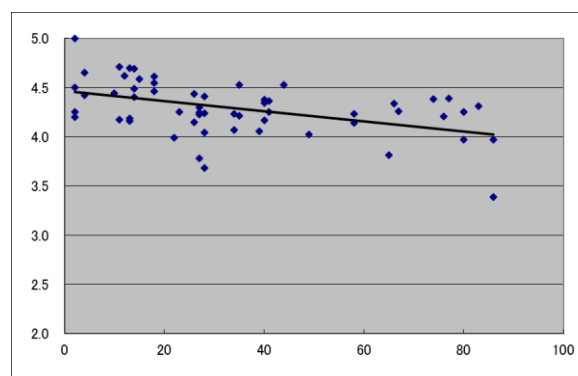


図11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.46$ (n=57)

(7) 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図 12 に示した。それぞれの科目数は心理学科が 9、6、22 科目、コミュニケーション学科が 8、6、43 科目であった。両学科ともにすべての科目において回収率は概ね 80% を上回っており、高い回収率が今年度も維持されていることが示された。

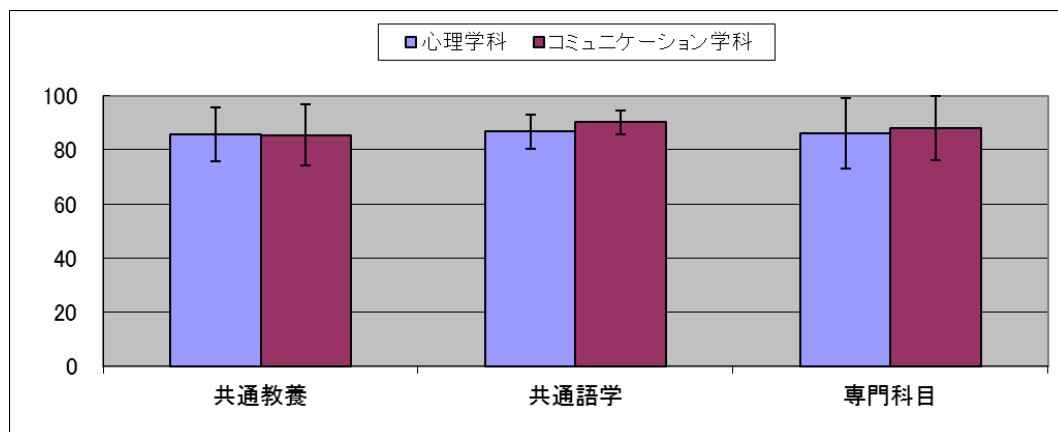


図 12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、心理学科で 9、6、22 科目、コミュニケーション学科 8、6、43 科目

(8) 学修時間と学修行動

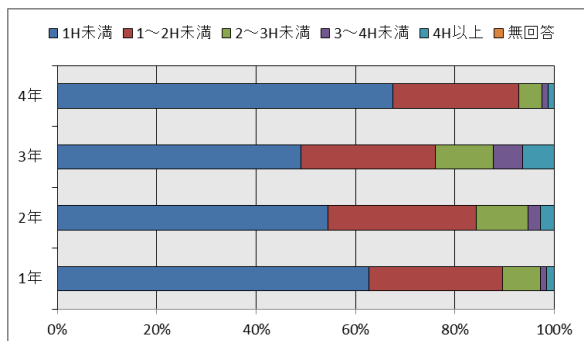


図 13 心理学科の授業外での学修時間

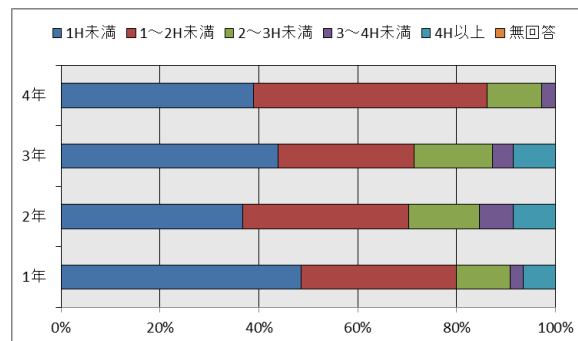


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、授業時間以外でその科目に関する学習時間が 1h 未満の学生が両学科どの学年においても大きな割合を占めており、これらの傾向は昨年と同様である。ただし、両学科とも 4 年生の学修時間、特に 3~4h、4h 以上の学生が少なくなっている点は今後の検討課題と言えよう。いずれの学科、学年においても学習時間が多いとは言えず、今後授業外での学修時間についてどのようなことをすべきであるのか、授業内での指導やシラバスなどによる課題の指示など対策が必要であると思われる。

最後に、昨年度との顕著な違いとして、両学科ともに「無回答」の学生が皆無である点を指摘しておきたい。

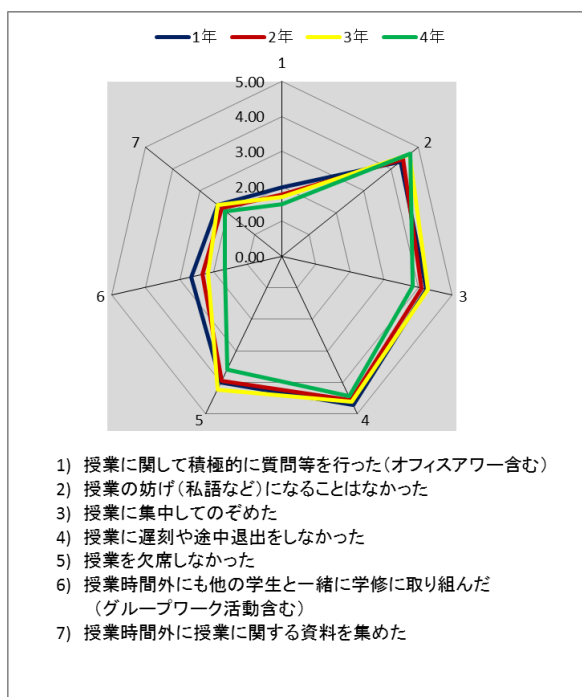


図 15 心理学科の学修行動

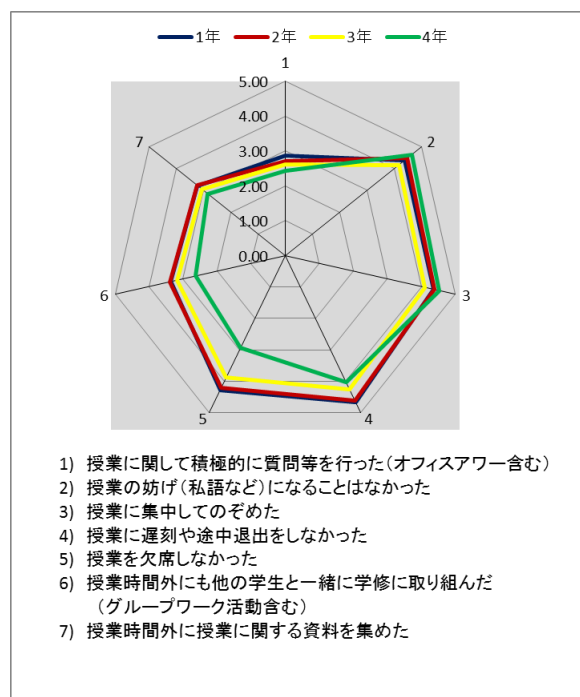


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。両学科とも、4 年生を除き、授業時間内での学修行動に関する評価は非常に高くなっており、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。また、授業に関して質問をした、授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ、授業外に授業に関する資料を集めたなど授業時間以外での学修行動（質問 1、6、7）は昨年度に続き両学科ともに低く、特に心理学科では顕著である。レポート課題の提出、グループで実施される演習など、資料を集めることやグループワーク活動などを授業時間以外で取り組むことが求められているはずであるが、行動に移されていない様子が示唆された結果となった。この点については、今後さらに課題がどのように遂行されているかの確認や授業外での学修方法についての具体的な指導、シラバスでの具体的指示といった対応が必要であると思われる。逆に、授業の妨げをしなかった、授業に集中してのぞめたなどの授業時間内の学修行動（質問 2、3）は昨年度と比べて若干高くなっており、この傾向はコミュニケーション学科で顕著である。この点については、今回から調査回答時に氏名・学籍番号を記入する方式に変わった点とあわせて考察する必要があると思われる。

令和元年度 前期末 人間生活学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告は、令和元年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 130 科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う 2 項目、授業及び学修に関する 18 項目（評価基準は 1～5 点）の計 20 項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計 18 項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1 項目（1h 未満、2h 未満、3h 未満、4h 未満、5h 以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 7 項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として 10 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「平成 30 年度仁愛大学 FD 推進活動報告書」を御覧ください。

（1）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 8 科目から回答を得た（図 1 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 272 名、2 年生が 29 名であった。

1・2 年生共、全項目の平均「全体」は 4.0 程度で項目別評価は「授業方法」が高く、「総合評価」が低かった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 8 科目から回答を得た（図 2 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 192 名、2 年生が 60 名、3 年生が 12 名であった。

1 年生は全項目が 4.0 未満、2 年生は全項目の平均「全体」が 4.0 程度で項目別評価は「授業方法」が高く、「総合評価」が低かった。3 年生は全ての項目が 4.5 以上と高評価であった。

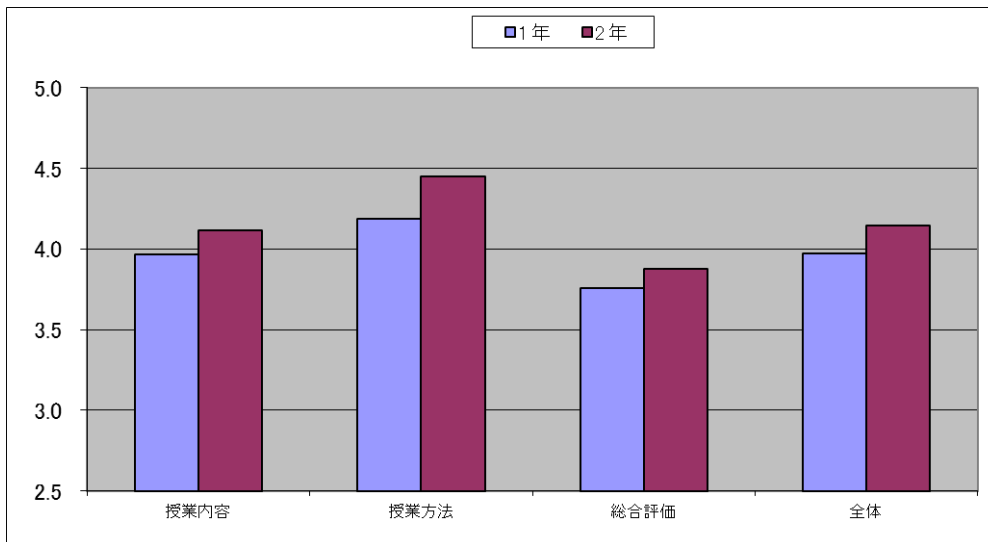


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=272名、2年=29名

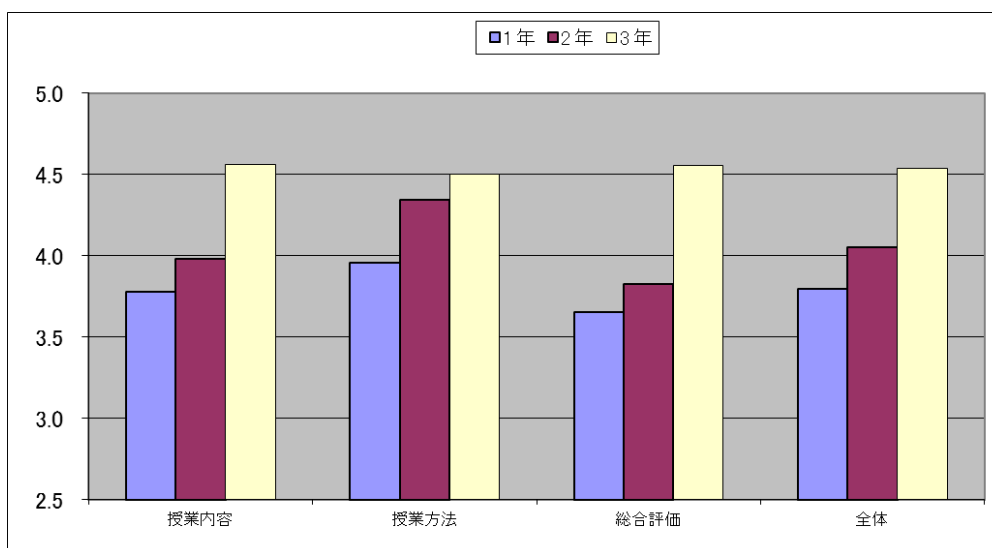


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=192名、2年=60名、3年=12名

(2) 共通語学科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において8科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が125名、2年生が14名であった。

2年生は全ての項目が4.0以上であった。1年生は「総合評価」のみが4.0を下回り、全項目の平均「全体」は4.0以上であった。

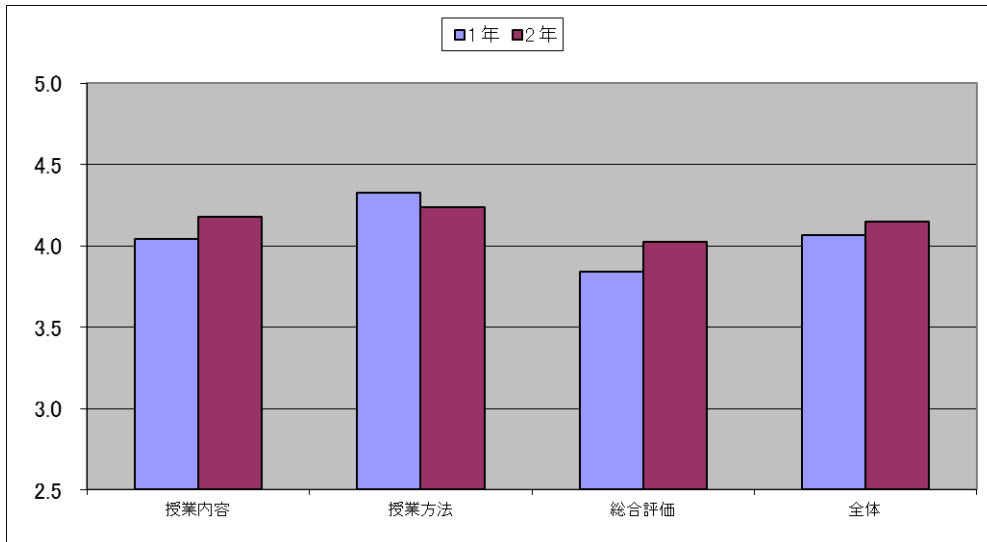


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=125名、2年=14名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において9科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が95名、2年生が22名であった。

2年生は全ての項目が4.0以上であった。1年生は「総合評価」のみが4.0を下回り、全項目の平均「全体」は4.0以上であった。

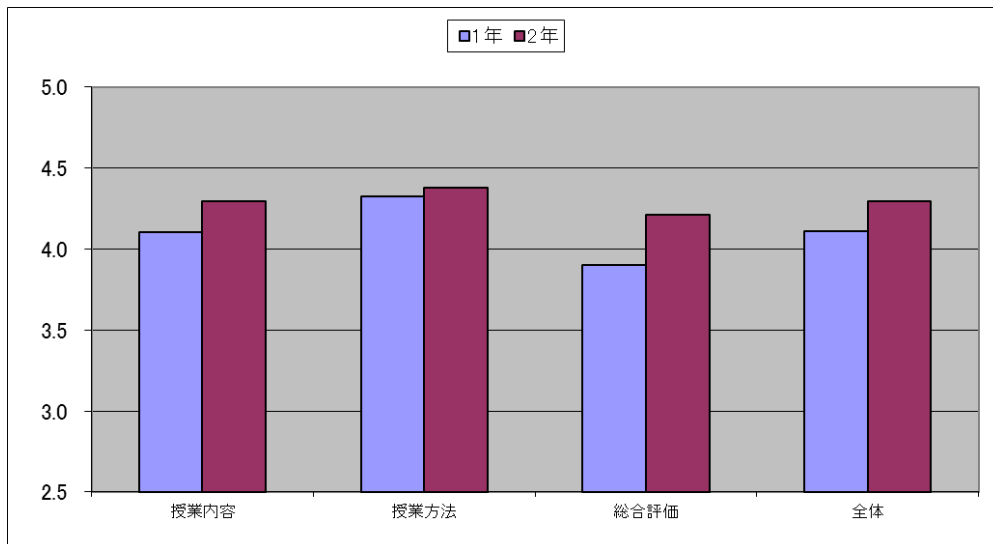


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年=95名、2年=22名

(3) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 57 科目から回答を得た (図 5 参照)。延べ回答人数は、1 年生が 609 名、2 年生が 749 名、3 年生が 594 名、4 年生が 30 名であった。2~4 年生は全ての設問の評価が 4.0 点以上であった。1 年生では授業方法以外は 4.0 をやや下回る結果であった。

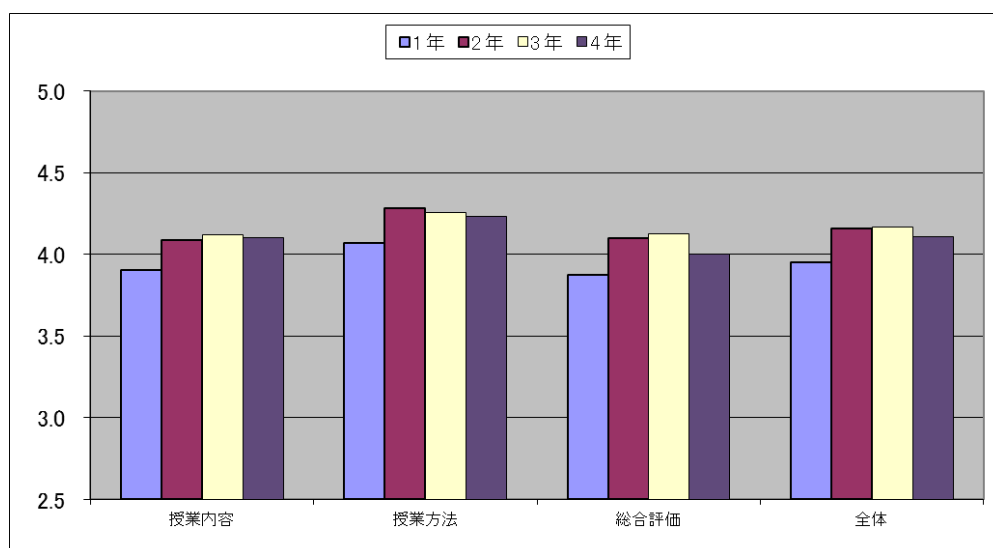


図 5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=609 名、2 年=749 名、3 年=594 名、4 年=30 名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、56 科目から回答を得た (図 6)。述べ回答人数は、1 年生が 389 名、2 年生が 848 名、3 年生が 338 名、4 年生が 28 名であった。

全ての学年において全設問の評価が 4.0 点以上であった。

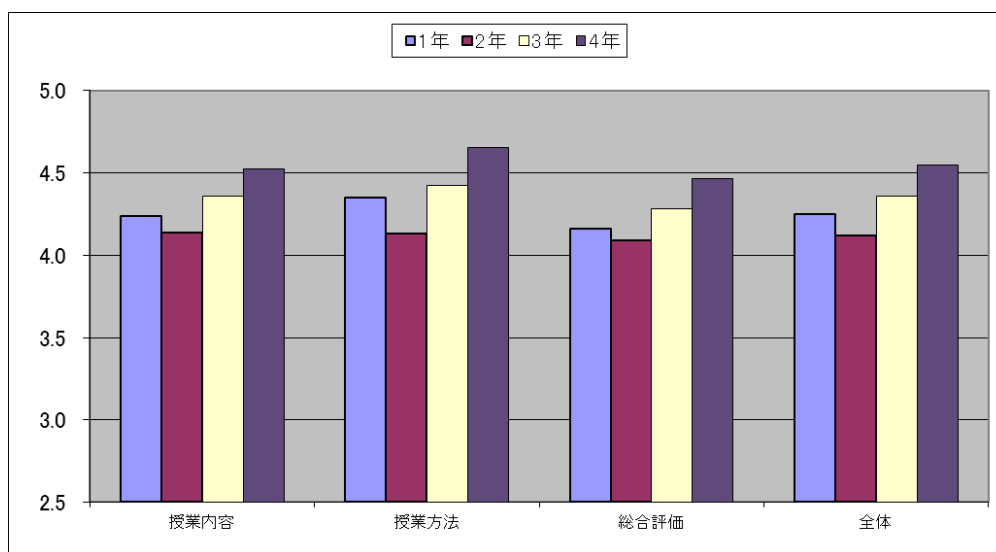


図 6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=389 名、2 年=848 名、3 年=338 名、4 年=28 名

(4) 科目の種類ごとによる比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は121科目である。なお、学部共通科目9科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目の各設問の平均評価点は、共通科目の「授業方法」4.4程度を除いて4.0～4.3の範囲内で上下がある結果で、共通科目が専門科目に比べばらつきが小さく、共通科目への評価の個人差が少ないようであった。

子ども教育学科では、昨年度と同様の傾向で、すべての設問において共通科目より専門科目での評価が高く、共通科目は全設問の平均評価点が4.0程度、専門科目は4.3程度であった。

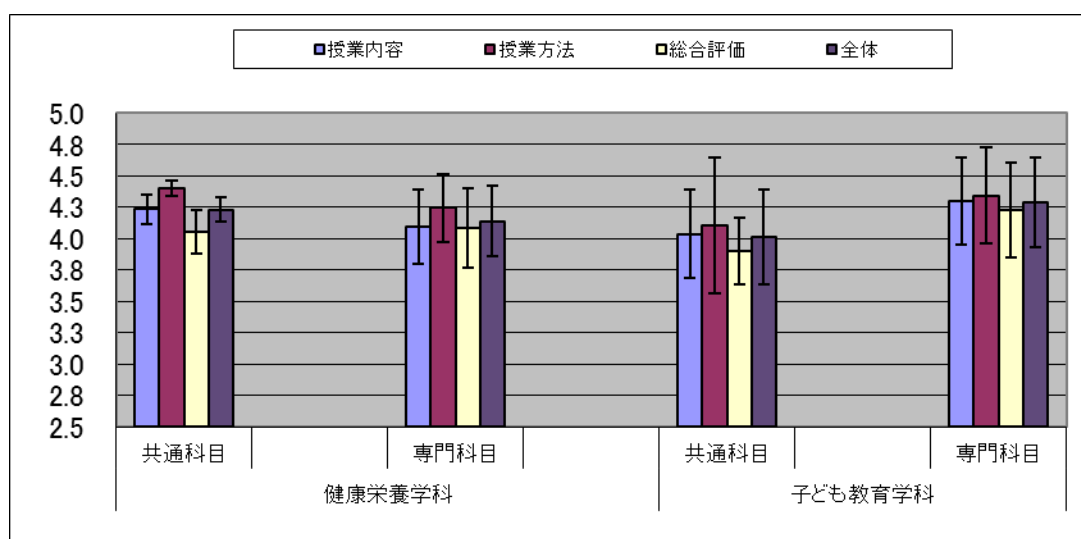


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)
共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で7、56科目、
子ども教育学科で6、52科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は121科目である。

健康栄養学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は4.0～4.3の範囲内にあり、ほぼ同じ傾向であった。

子ども教育学科では、必修科目の各設問の平均評価点は4.0程度に集中し、選択科目は4.3程度に集中していた。

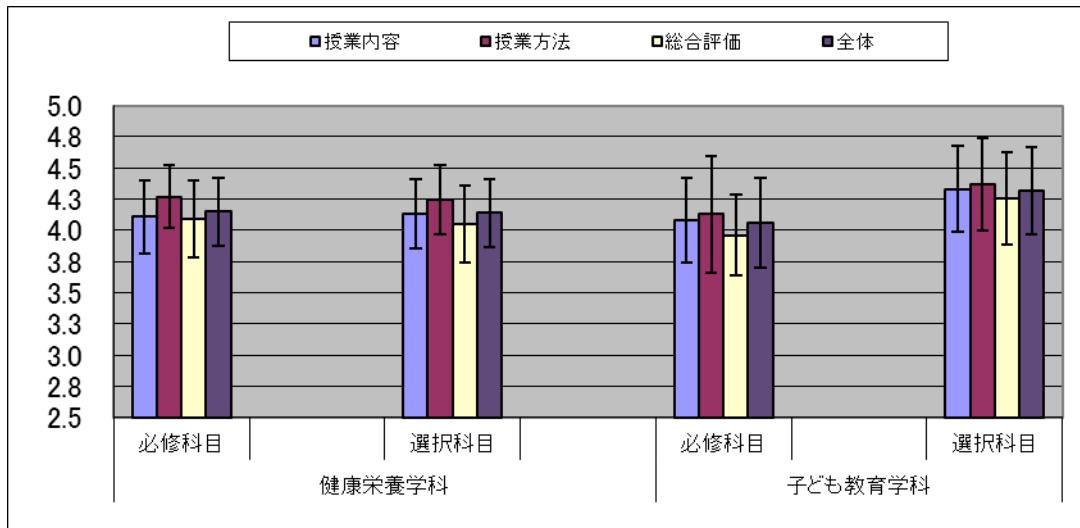


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で49、14科目、
子ども教育学科で13、45科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は121科目である。

健康栄養学科での各設問の評価は、40名未満と以上における平均評価点はどちらも4.0~4.3の範囲内にあり、40名未満においてやや高めの平均評価点を示していた。

子ども教育学科での各設問の平均評価点は、40名未満がすべての設問の評価が4.3以上で、40名以上が4.0~4.2程度であった。

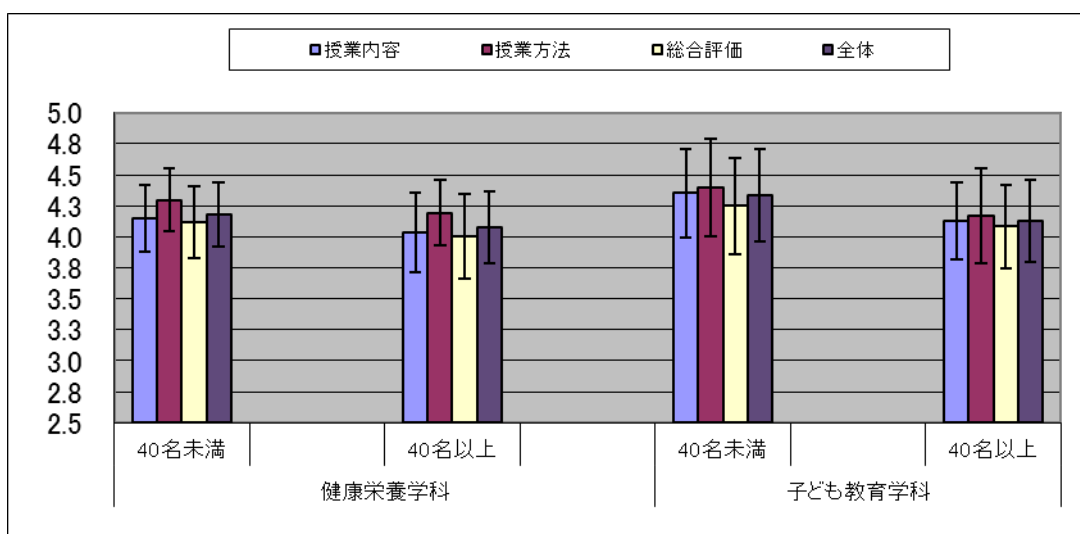


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で44、19科目、
子ども教育学科で38、20科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図10~12は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が $r = -0.41$ で、受講者数が少ない程、評価が高い傾向があった。昨年度全体の相関は $r = -0.12$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r = -0.27$ 、子ども教育学科は $r = -0.44$ で、子ども教育学科で負相関が強くなっていた。

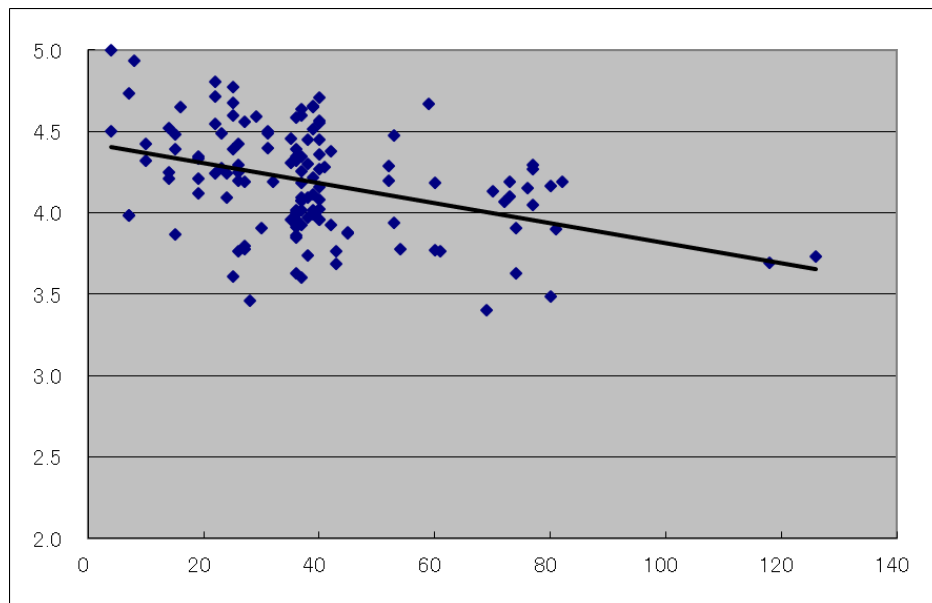


図10 人間生活学部 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.40$ (n=130)

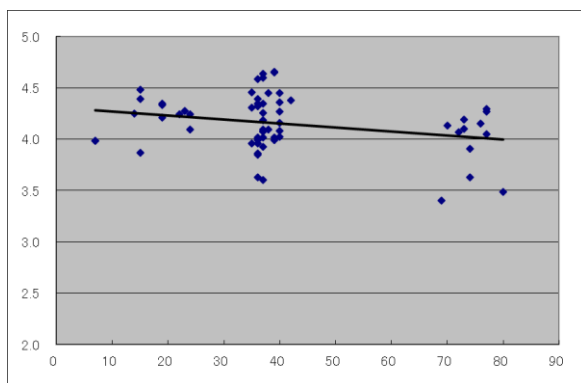


図11 健康栄養学科
 $r = -0.27$ (n=63)

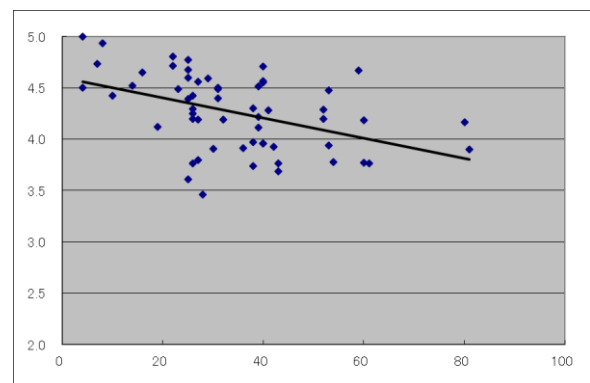


図12 子ども教育学科
 $r = -0.44$ (n=58)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図13に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が3、4、56科目、子ども教育学科が3、3、52科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は共通教養科目・共通語学科目は両学科とも90%以上であり、専門科目は両学科とも80%以上であった。専門科目での回収率が昨年度と比べると両学科でやや低下しており、正確な理由はわからないが、アンケート回収方法の変更が影響している可能性がある。

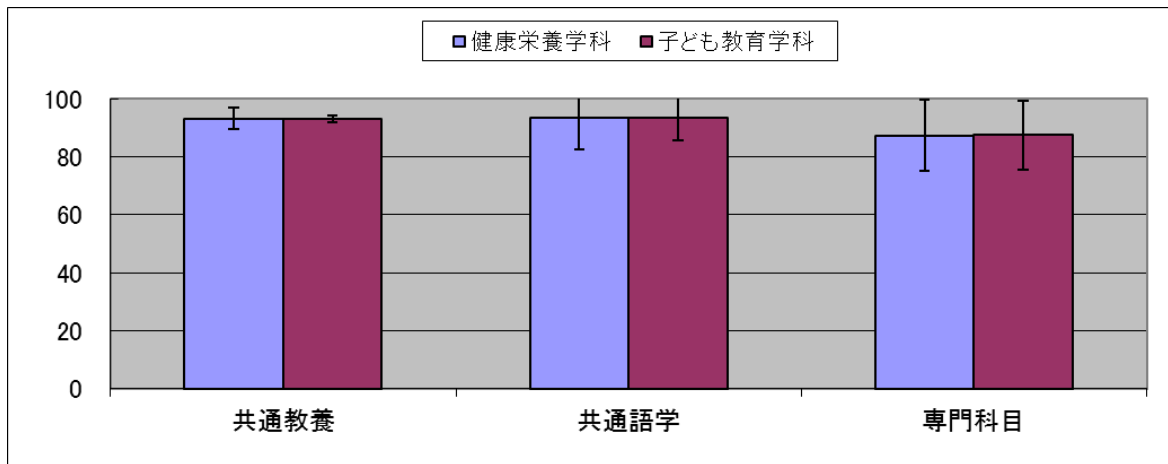


図13 各科目の平均回収率 (±SD) (%)
 それぞれの科目数は、健康栄養学科で3、4、56科目、
 子ども教育学科で3、3、52科目

(5) 学外での学修時間

[健康栄養学科]

図14は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が1,006件、2年生が792件、3年生が609件、4年生が31件であった。1年生は1時間未満が約半数、2年生と3年生は約40%となっており、2時間以上の者の割合は1・2年生20%程度、3年生で35%以上に増えていた。

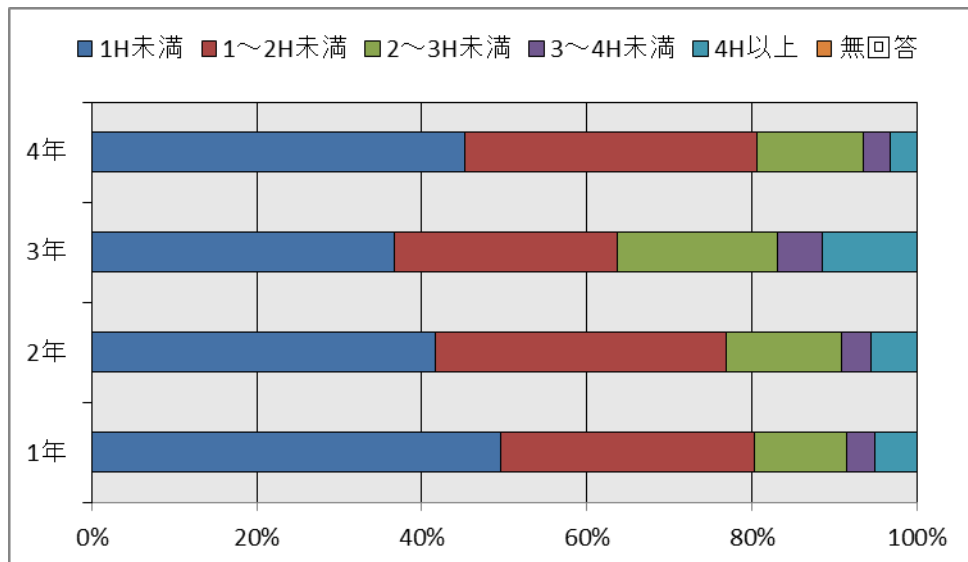


図14 健康栄養学科の授業外での学修時間

[子ども教育学科]

図15は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1年生が676件、2年生が930件、3年生が355件、4年生が29件であった。1時間未満の比率が1、3年生では55%程度、2年生では45%程度であった。

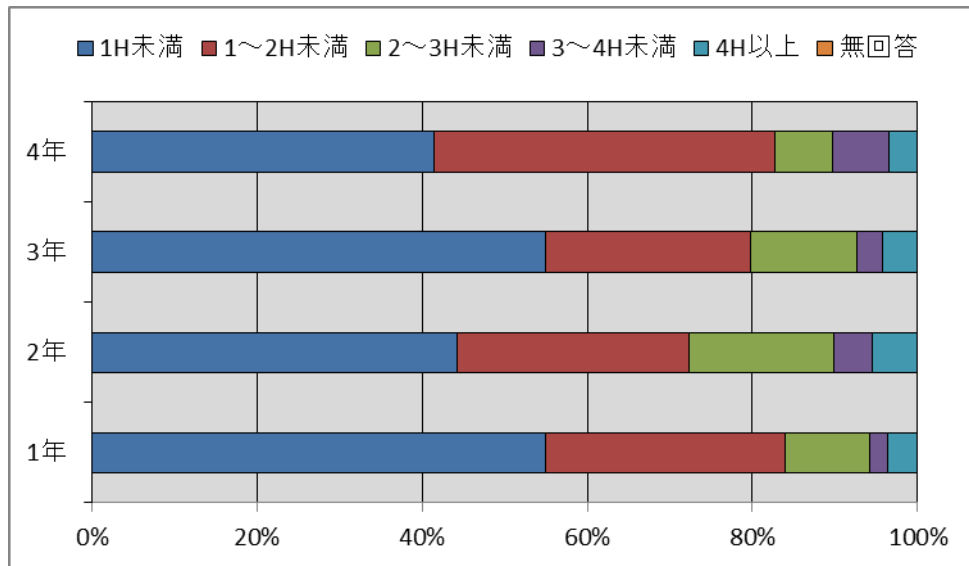


図15 子ども教育学科の授業外での学修時間

(6) 学修行動について

[健康栄養学科]

図16は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」、「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」は3年生が他の学年に比べやや高い値を示していた。この学年は昨年度（2年生時）も他学年に比べ高い値を示しており学修に対する意欲がやや高い学年と考えられる。

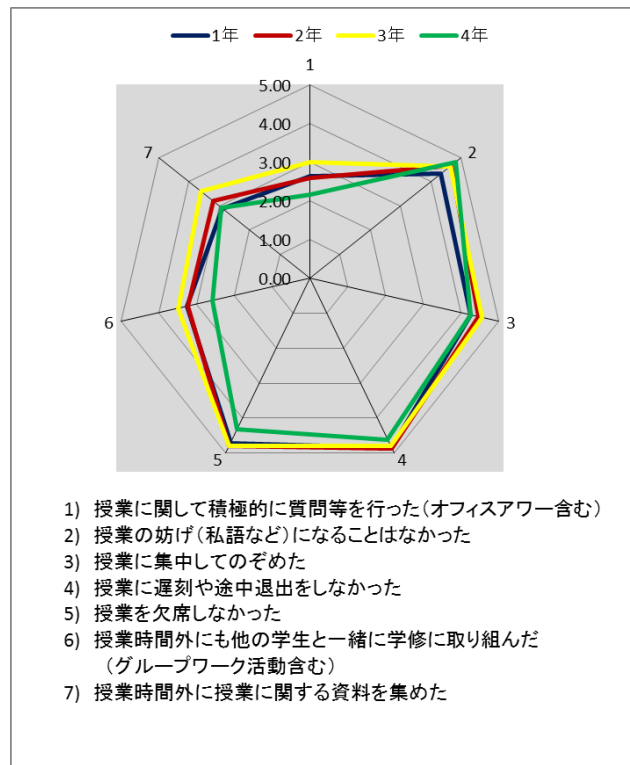


図16 健康栄養学科の学修行動

[子ども教育学科]

図17は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。全体的に昨年度と同様の傾向であるが、3年生で「授業に遅刻や途中退出をしなかった」と「授業を欠席しなかった」の項目が、1・2年生や昨年度の3年生と比較すると低い値を示していた。

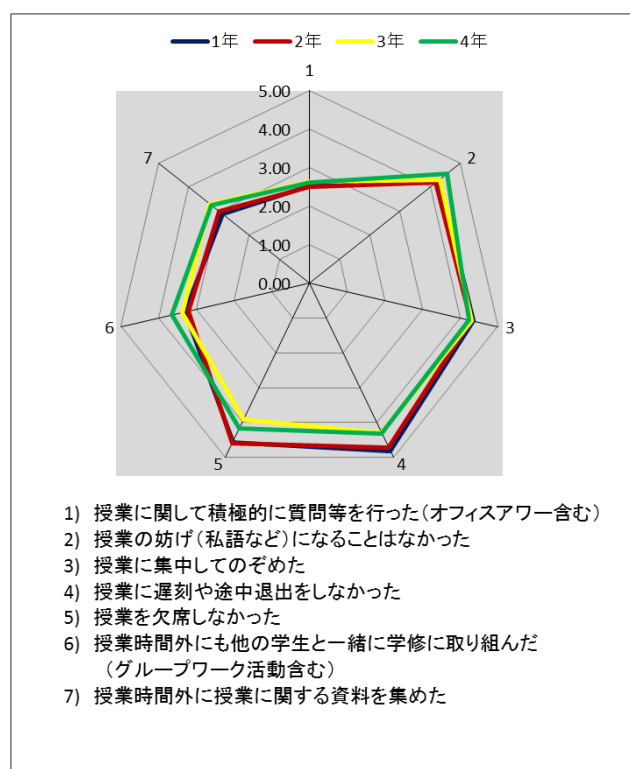


図17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。評価は学科や学年によって異なる特徴があることが昨年度と比較することにより推察された。各々の科目の授業の質を高く保つことは重要だが、併せて、学年毎の学生の雰囲気・やる気がどうやってつくられていくのかにも着目して、学修意欲を活気づける術についても考える必要があると考えられた。また、大学生に求められる学修方法や姿勢が1年生前期に身に付くよう意図的・具体的に伝え、学生が自主的な学修に取り組めるよう授業内容や課題を工夫して導いていくことは重要で、成績と評価との関連性についても解析し検討することが必要と思われる。